

国際保健におけるSMART人類学

クン・ペータース・グリーテンス

バス・インターナショナル、アントワープ熱帯医学研究所

翻訳：増田 研

国際保健の現場では、集団を対象とした疾病の研究、すなわち疫学的な研究が主流である。民族誌的な発見をそこに応用するために、ここではSMART人類学を提案する。



ベトナムの辺境地域にある医療施設にて、フィールドノートに記載している筆者。

国際保健分野における、医学と人類学の協力関係——その難しさ

イギリスの学術雑誌「ネイチャー」によれば、この11年あまりで文化人類学や社会学といった社会科学の研究者は11%も増えたという。だが、社会科学が気候変動や持続的開発、そして保健といった現代の課題の解決に貢献しているとは言いがたい。こうした問題はみな人間の行動の変化に関わっているというのに、だ。

国際保健分野においては文化人類学者と医学者の協力関係が欠かせないが、どちらの側もその関係のあり方に難しさを感じている。なかでも人類学者の方法論、とりわけ質的研究法は偏見を持たれている。質的研究は、医学者にとっては「面白いが的外れなもの」、政策策定者にとっては「決め手に欠けるもの」と見なされている。医学的観点からすれば、文化人類学者はただ突飛な社会的文脈を扱っているだけで、一般化できない話ばかりを集めているように見えているのだ。そこには、標準化された手法も計測機器も、文化横断的調査をするための互換性もなく、ただ制御不能な柔軟性しかないように見られてしまう。

ここでは、マラリアの予防と撲滅に関する調査の事例をもとに、ふたつの異なる分野の架け橋となり得るものとしてSMART人類学を提案する。

SMART人類学

SMART人類学とは、特定の課題に対する (Specific)、計測可能で (Measurable)、応用可能な (Applicable)、要素間の関連性を重視し (Relevant)、限定された時間内に完了する (Time-bound)、そういう条件を満たす人類学的調査のことである。

保健・医療分野における人類学的調査は、文化や行動のさまざまな関連性を明らかにしつつも、得られた発見を応用できるようにする必要がある。こうした分野では、「標準化された手法」による調査、とくに保健プログラムの課題に直接答えられる調査をすることが求められる。こうしたアプローチは実用的な方法だとされるが、同時に理論的視野を狭めてしまうことも危惧される。

また調査は、限られた時間内に実施され

なければならない。その課題に対して答えを出すためにどれだけの時間をかけられるのか、ということを決断しなければならないのだ。開発プロジェクトでは、人類学者は最初から関与すべきであって、説明できないことが発生したときに救いの手を差し伸べるためのものではない。

応用可能性と関連性への目配りも大切だ。ガボンでは、医療スタッフが病院で採血した血液を秘密結社の薔薇十字会に売り渡している、という噂があったが、文化人類学的な調査によりそれが、人々の臨床試験への参加を決定する因子だったと判明した。このような民族誌的洞察は重要だが、こうした情報は明白に「医学的な話」でないがぎり、医学者の興味を引くことはない。

そこで、調査で得られた結果を数値化する必要が出てくる。血液バンクにおける血液の不足、人々の献血の意志、病院スタッフへの信頼、ワクチンへの理解といった臨床試験に関わるさまざまなリスクに対する人々の受け止め方を数値化すれば、適用可能な結果として示すことができるのだ。こうした問いは、SMART人類学の「計測可能性」という条件に関わってくる。

計測可能性と「予期せぬ発見」

質的研究と量的研究を組み合わせたミックスマ法に多くの利点があることは、近年ますます



ペルー、イキトスにて。アマゾン川を舟で移動する人々。



ペルー、イキトスにて。アマゾン川流域の漁村に建つ高床式住宅。



ベトナム-カンボジア国境地域にて、伝統的なパイプをふかす女性。

ベトナム-カンボジア国境付近の村で、蚊帳の配布を待つ女性たち。



す注目されるようになってきた。質的データは統計的に一般化されることはない。一方、とくに気を遣うテーマや、状況がよくつかめていないことを説明しようとする、標準化された質問票調査の限界は明らかだ。

ミックス法を使えばより適切な方法論をもって調査課題のさまざまな側面にアプローチできるし、また、現代的な課題についての議論を活性化させることができる。ここでは疫学がいうところの「残余交絡」に対する民族誌的な調査の重要性に光を当てたい。残余交絡とは、関連する変数がすべて分かっているわけでもデータが集められているわけでもない場合に、量的調査の統計的解析によってはうまく答えを得られないという事実のことだ。

ベトナム南部のニントゥアン省では、マラリア予防のための長期残効ハンモック（殺虫剤をしみ込ませた繊維を用いたハンモック）の効果を調べた。蚊帳とハンモックの利用については統計的に明らかにできるが、それらの利用に影響を与える人間行動的な変数は人類学的な調査によってしか明らかにできない。調査は当初、その地のラグライ人たちが村で夜を過ごしていることを前提としていたが、調べてみると、人々は村ではなく熱帯雨林で寝泊まりしていた。民族誌的な調査によって、人々が、マラリアに感染しやすい雨季に熱帯雨林のなかで焼畑農耕を営み、そこにセカンドホームを作って滞在していたことが判明したのだ。森林はマラリアを媒介する蚊に多く曝される場所である。

こうした「予期せぬ発見」によって、質問票調査の結果を見直し、森での生活に関する調査項目を加えることができた。以前

の調査では93.4%の人が就寝時に蚊帳やハンモックを使っていると回答していたが、それは「自宅に蚊帳を使っていますか？」という聞き方をしていたからである。調べ直してみると、森では57.9%の人しか使っておらず、ほぼ半分の人がマラリア蚊に曝されていたことになる。この民族誌的発見によって、それまでの疫学的なマラリア曝露の理解は根本的に変わらざるを得なかった。

ブルキナファソではクリニックに検診に訪れた妊婦に、2~3回にわたってマラリア予防薬を投与する臨床試験を実施している。この調査で分かったのは、10代の女性が妊婦検診をきちんと受けていないこと、とくに、マラリア感染のリスクが高くなる雨季にその傾向が強くなるということだった。つまり、10代の妊婦に薬を届けることが難しいのだ。

もともとこの臨床試験では、10代の妊婦は対象とされてこなかった。10代で、とりわけ初めての妊娠をしている女性は、妊娠の初期には、呪いや不運にさらされやすい弱い存在だと認識されている。したがって妊娠の事実を外部にさらすことは危険であり、とくに家族の外には妊娠を明らかにしない。文化的な「つつましさ」や「はにかみ」の感覚もあって、10代女性の最初の妊娠を隠すことが適切な行動様式として定着しているのだ。そこではコミュニティーの期待と

ルールによって女性の行動が左右されていて、彼女らは妊婦検診に行くことで妊娠の事実が公になってしまうことを避けたいと考えるようになる。

民族誌的データからは次のようなことが言える。つまり一部の10代女性はまだ気づかれていない存在であって、量的な分析では考慮されないままであった。質的な研究はしかし、妊婦検診とマラリア予防のためには、10代女性こそが対象とされるべきであり、とくに初めての妊娠に先立って、現地社会の脈絡に適合する形で対象とされるべきであるということを示しているのだ。

新たな挑戦

SMART人類学は国際保健において分野横断的な調査をするための方法を提案する。この方法を広めるためには、人類学的データに「計測可能な質的データ」を取り入れること、あるいはミックス法を取り入れることが必要だ。民族誌は量的なサーベイによって補完されるし、同時に、予期せぬ変数や見過ごされていたリスクグループといった残余交絡を示すことで、鍵となる洞察を提供することができる。人類学的な調査は、自らの方法論に求められた質の水準を保ちながら、妥協することなく、分野横断的な調査に馴染ませるように努力しなければならないのだ。



ベトナム・ニントゥアン省



ブルキナファソ

ベトナムにて、マラリアに関する聞き取り調査をする現地スタッフ。



ベトナム、ニントゥアン省にて、マラリアに関する調査を行う現地スタッフ。右上手に蚊帳が見える。



ベトナム、ニントゥアン省の熱帯雨林近くに建設された伝統的な家屋。



ベトナム、クアンナム省にて、カゾン人の少女が学校の建設の手伝いをしていた。



ブルキナファソ、ボロモにて調査を行う筆者。

ブルキナファソ、ボロモにて。妊娠中のマラリア予防を啓発するためのイラスト。